

第5章 : 教育系の資格 ～ 悪者が木下変わった ～

●黒田

その時は意外にもあっけなく訪れた。

オレはその日も午前からテレアポに励んでいた。

断られるのはもちろん怖いけど、今はそれ以上に燃えるものがあった。

「はい、では一度診てもらおうかしら」

「そうですか…ではまた何かありましたら…えっ!？」

聞き逃してしまいそうだった。いつものように断られるとしか思っていなかったから。初めてのアポイントが取れたのだった。

「はい！今すぐでも!!!」

…では3日後に、ありがとうございます!!」

初アポが取れた時は胸が躍るように嬉しいものかと思っていたが、意外なタイミングで心の準備ができていなかった。しばらくボーっとしてしまった。

放心状態のまま木下さんに報告をした。

「木下さん、オレ、アポ取れました…」

「うん、見てたよ。よかったな。黒田くんの努力が通じたんだね、きっと」

明智もこちらを向いてニコッと笑ってくれた。

オレは明智のアポの時はひとつも喜んでやれなかったのに。

その後、オレにも少しずつアポイントが入るようになってきた。

「オレもなかなかやるな、やればできるんだよやっぱり」

潰れかかっていたオレの自信は少しずつ回復していった。

=====

●木下

天狗になっていく黒田の立ち振る舞いは目にあまる。

アポイントが入るようになってきたのに自信をつけたのか、明智のテレアポトークを聞いては、あそこが良くないだのここが良かったのだと、偉そうに指導している場面を見かける。

自分のアポイントが入ると、「あ〜忙しい」とこれ見よがしにスケジュール帳を開いて見せる。

『Hな経営』の94ページにある「お山の大将」チェックリストを確認すると、今の黒田の状況がピッタリあてはまった。

-
- ・あるべき論を突きつけて、他者の要求を聞こうとしない
 - ・言葉づかいが乱暴になる
 - ・自分が最も忙しいという素振りを見せる
 - ・自分の業務が多少遅れても、お詫びしない
 - ・他者に何か業務をしてもらっても、心のこもったお礼を言わない
-

そして、その対処法にはこう書かれている。

お山の大将をしばらく放置すると、この人材は他者から相手にされなくなってしまう。そうならないために対処すべきことは、このような行為をした際に、ど真剣に叱ってあげることだ。

すでに同期の明智は、黒田の話をほぼ無視している。このままでは社内でも孤立してしまうだろう。

ど真剣に叱る。

ボクは褒めるのは苦手だけど、叱るのはもっと苦手だ。

ある日、自主残業の時間に黒田の姿はなかった。

明智に聞くと今日はすぐに帰ったとのこと。

黒田と明智は、夜に電話がつながる家庭が多いと本で読んだらしく、最近では18時を過ぎても自主的に残業してテレアポをする日が続いていた。

とりあえずこの日は「最近頑張っていたから、たまには息抜きもいいだろう」ということにした。

次の日、始業時刻に黒田の姿はなかった。

心配し電話をしてみると、留守番電話に繋がる。

15分ほどすると、息を切らした黒田が会社に入ってきた。

「すみません…遅れてしまいました」

ボクは「気を付けなよ」と軽く注意して黒田を席に戻した。今のは叱る場面ではなかったのか、しばらくしてからそう思ったけど、後から叱るのは良くないとも思った。

次の日も、黒田は遅刻をした。

黒田は反省してないのかと、さすがに心配になった。

2日連続での遅刻はマズイ、今日は叱らなきゃいけない。

叱るのは初めてだ。ボクは緊張した。なんて言って叱るか、悩ましい。

そうこうしていると、入口から黒田が入って来た。

黒田は入るなり大きな声で言う。

「申し訳ありませんでした！」

必死な表情で頭を下げる黒田。今度は本当に反省しているようだと思い、あまり強く注意しなかった。

その後、1週間は無事に過ぎた。

黒田も時刻通りに出勤してきている。ボクは少し安心した。

しかしある朝、始業時刻に黒田の姿はなかった。

「またやったか」と思い、電話をしたがつながらない。この日は、しばらく待っても黒田は出勤して来なかった。

「黒田くん何やってんだろ。やっぱり反省してないんだな。自覚ないなあ。ボクがしっかり叱らなかつたからいけないのかな。や、叱るとかの前に、こんなに遅刻するようじゃダメだよ…社会人としての自覚が足りないんだ」

結局黒田は午後になっても出社せず、ボクは自分の仕事も忙しくなり黒田の事は忘れていた。

すると、たまたま織田社長が通りかかった。

「あれ？今日は黒田はどうした。アポか？」

「いえ…実はまだ…」

「なにい！」状況を話すと、織田社長の目が急に鋭くなった。
あの修羅場をくぐりぬけてきた人間の目だ。

「黒田くんは時間にだらしないので、寝坊しているのだと思います」

「電話はしたのか？」

「はい、しましたが出ません。恐らく気まずくて出られないのだと思います」

「バカ野郎！！何言ってんだ！今すぐ家に行って来い！何かあったらどうするんだ！」

ボクは社長にどやされて、そのまま黒田の家へ向かった。

「社長はああやって言うけど、黒田くんはだらしないだけなんだよ…」

「ボクだって、仕事がたまってるんだけどな…」

電車を降り、ぶつぶつと独り言を言いながら歩いた。

夏に向けて元気になってきた太陽が照りつけてくる。黒田の家に着く頃にはスーツの中は汗だくになっていた。

黒田の家に着き入口の呼び鈴を押すが、何の反応もない。入れ違いになってしまったのだろうか。

念のためもう一度携帯を鳴らすと、家の中からピピピピ…と着信音が聞こえてくる。

やはり中にいるようだ。

ボクはドンドンとドアをたたき、呼び鈴と携帯を何度も鳴らした。

しつこくやっていると、ようやく黒田が携帯に出た。

「もしもしい…」

「もしもしじゃないよ、何やってんの？今黒田くんの家の前にいるよ。早く開けて」

「ふあい…」

黒田の気の抜けた声を聞くと、怒りがこみ上げてきた。

今日こそきつく叱ってやる。

ボクは叱るではなく怒りをぶつける勢いだった。

ガチャリとドアが開いた瞬間、ボクの感情は一気に変化した。

黒田はフラフラとボクにもたれかかるように倒れこんできた。

顔が明らかに赤い。

「どうしたんだよ？黒田くん」

「す、みません…昨日ちょっと熱があったので…早めに寝たのですが…」

おでこに手を少し触れただけで高熱だと分かった。

黒田の家は男の一人暮らしそのものだった。

ワンルームの部屋は、ベッド以外の所は座る場がないほどモノが散乱している。

冷蔵庫を開けると古い玉ねぎが黒くなっていた。

シンクには洗っていないお皿が数枚あり、隣にはカップめんの空容器がいくつも重ねられていた。

「黒田くん、いつも何食べているの？」

「カップめんが多いっす…コストパフォーマンスが一番良いから…」

栄養不足と連日の疲れから出た熱だろうと思った。

『Hな経営』のあるページの内容を思い出した。

それはこの状況に当てはまる。ボク自身に当てはまることだ。

ボクは知らなかった。黒田がこんな状態で仕事をしていたことを。
ボクは気づいた。黒田のことを知らずに、会社の理由ばかりを押しつけようとしていたことを。
申し訳ないと思った。

会社に戻って『Hな経営』を開くと、P80「チームメンバー関心度チェックリスト」にはこうあった。

-
- ・ チームメンバーの名前をフルネームで書けますか？
 - ・ チームメンバーの生年月日を知っていますか？
 - ・ チームメンバーの家族構成はわかりますか？
 - ・ チームメンバーの入社動機を把握していますか？
 - ・ チームメンバーの将来の夢は何ですか？
 - ・ チームメンバーが、今関心を持っていることは何ですか？
 - ・ チームメンバーが、今悩んでいることは何ですか？
 - ・ チームメンバーをやる気にさせるために効果的なことは、何ですか？
-

この中でクリアできるのはフルネームくらいだ。他は全く答えられない。
せっかく膨らんでいたボクの自信は急速にしぼんでいった。

黒田が再び出勤してきたのは2日後だった。

「先日はすみませんでした」黒田が謝ってくる。

「うん、よかったよ。回復して」ボクはそれしか言えなかった。

他には何も言ってやれなかった。アドバイスも、注意も、励ましも、何も。

ボクの心とは裏腹に黒田のテレアポの調子はよかった。

午前中だけで3件のアポが入ったようで上機嫌だった。

「おれ、やっぱすげえわ」

更に天狗になっていく黒田が想像された。

こんな時こそ、教育係のボクがちゃんと指導しなくてはならないはずだ。

指導しなくてはならない。

でも、ボクに指導する資格があるのか、それ自体が疑問だ。

黒田のことを全く知らない、いや知ろうともしていなかったような先輩が指導をしていいのか。織田社長は、忙しくて時間がないはずなのに、1人1人のことを調べて入社式で期待を述べていた。それに比べてボクは…。

ヒントが欲しくて『Hな経営』をめくった。

でも、さすがに自分に自信のない時のことは書かれていない。

ボクは、平川さんの「困った時はいつでも」の言葉に甘えて連絡することにした。

平川さんは相変わらず親切に対応してくれた。ボクの気持ちも分かってくれているようだ。ボクは最近起こったことをひとつずつ平川さんに話した。

「きっと、黒田さんは感謝できてないんですね。周りの協力があるからこそうまくいっていることを理解できていないような気がします」

その通りだと思った。確かに最近アポはとれているけど、それを黒田は自分ひとりの力だと思っている。

「そういえば、もう初任給は出ましたよね？」

「ええ」

「黒田くんは何に使ったのでしょうか？ご存知ですか？」

「いえ…聞いていません」

ボクは恥ずかしくなった。これも研修でやったことなのに…

ボクの自信は更にしぼんでいった。

「あと、木下さんのことですが」

「はい…」ボクはゴクリと唾を呑んだ。

「自分で気づけたのだから立派ですよ。自分では気づけない人もいっぱいいますからね。」

Humanity が足りないのはリーダーとしてはまずいですが、自分で気づけたことには自信を持って下さい」

平川さんにそう言ってもらえると、少しだけ救われた気がした。

翌日、ボクは黒田に聞いた。

「黒田くん…」

「なんすか？」黒田は自信満々のいでたちで、どっちが先輩か分からない。

「初任給もらったじゃん」

「はい」

「何に使ったの？」

「ええ！いいじゃないですか！別にオレの給料なんだから」

「いや別に、黒田くんのプライベートをどうこうってわけじゃないんだ。ほら研修でやったじゃん？ボクもさっきふと思い出してさ」

「研修…？やりましたっけ？初任給は欲しかった洋服を買いましたよ」

やっぱりだった。

黒田は研修中に自分で決めた事はすっかり忘れて、自分のことに使っていた。

感謝心がまるでないようだ。もちろん悪気も感じていない。

頭の中で黒田を悪者に仕立て上げていると、逆に不意打ちを食らわされた。

「木下さんは何に使ったんですか？」

「え、ボク…？」

ボク自身も何もしていなかった。

その場はごまかしたが、嫌な気持ちが残った。

黒田には感謝心をもって振る舞うよう求めているくせに、ボク自身は何もしていない。

去年はこんな研修が無かったなんて言い訳にもならない。去年気づけなかったのなら、今年でもやればいいじゃないか。

悪者は黒田ではなくボク自身に変わった。

ボクは他人には言うけれど、自分では何もしていない。
口先人間だ。

「ボクが教育係でいいのか」と臆病なボクが質問をした。

「ボクがやらなきゃダメだろ、社長に任命されたんだから」とボクの理性が答える。

「いや、できてないボクは社長の期待外れだよ」と臆病なボク。

「やっぱりボクじゃダメだよ…」と臆病なボク。

「社長に言っておろしてもらおう」とボク。